

修 士 論 文 要 旨

看護学専攻	生涯看護学分野 母性看護学領域	学籍番号	215603
		氏 名	野間由美
論文題目	助産外来で支援している助産師の10代の妊婦に対する認識		
キーワード	助産師、10代妊婦、助産外来、支援、認識		
<p>【背景】 現在の日本では10代の妊婦は、学業の中断や入籍前に妊娠するなど社会的規範から逸脱していると考えられ、医療へのアクセスを困難にしている。助産師が妊婦を支援する場として助産外来が注目されており、妊娠中に10代妊婦とのファーストコンタクトとなりえる助産外来で支援している助産師が、10代の妊婦をどのように認識しているか明らかにすることは重要である。</p> <p>【目的】 助産外来で支援している助産師の10代の妊婦に対する認識の様相を明らかにすることである。</p> <p>【研究方法】 助産外来で10代の妊婦を支援している助産師の語りを通して解釈する質的記述的研究とする。研究協力者は助産実践能力習熟段階レベルⅢ相当であり、10代の妊婦の妊娠期間を通して、継続的に複数回、助産外来での妊婦健康診査を担当した助産師9名である。平成28年5月～10月に半構造化インタビューによりデータ収集した。逐語録の意味内容を整理しコード化後、コードの共通性と相違性を比較しながらカテゴリー化した。データ分析においては、母性看護学、社会学の専門家からスーパーバイズを受けた。なお、三重県立看護大学研究倫理審査会及び研究協力施設の倫理審査を受審し承認を得た。</p> <p>【結果】 助産師は10代の妊婦を無計画で望まない妊娠等【妊娠のあるべき姿から逸脱している】と捉え、10代の妊婦は家族と不安定な関係性であること等から家族も含めて【専門職が介入しなければならない未熟性を抱えている】と認識していた。当事者目線で関わってもらえない等【妊婦として周囲から擁護されにくい】ため意思決定を支える必要性を認識しており、素直さや柔軟性等【伸びしろがあることが強みとなる】と認識していた。10代の妊婦との関係性については【助産師の振る舞い次第で関係性を深められる】が、【身近な人との繋がりが途絶えてしまう】と容易に孤立しやすい存在であると認識していた。</p> <p>【考察】 助産師が10代の妊婦を【妊娠のあるべき姿から逸脱している】と認識することは、10代の妊婦がスティグマ視を感じるような言動や態度を表出してしまうことに繋がりがかねない。助産師は10代の妊婦に対する自分の認識が偏っていないか、常に自己の認識を点検することが必要である。助産師が10代の妊婦を【伸びしろがあることが強みとなる】と認識していることは、10代の妊婦の成長する力を信じることであり、10代の妊婦が母親になる潜在的な力を発揮できるような支援に繋がられる。【助産師の振る舞い次第で関係性を深められる】と認識していることは、助産外来での助産師の継続的な関わりに繋がりが10代の妊婦との信頼関係形成に重要である。</p> <p>【結論】 助産師が自らの認識の仕方を自覚しながら支援することは、10代の妊婦との信頼関係を築く糸口となり、10代の妊婦の医療へのアクセスをしやすくし、社会的孤立を回避することが可能となる。退院後も繋がりが途切れないよう継続的に支援していくことが課題である。</p>			